

## 安齋伸先生を悼む

鈴木康治

上智大学名誉教授・安齋伸先生(クリスチャン・ネーム、クレメンス)の御葬儀が、カトリック高輪でさる一月早々に行われた。九七年暮れに発病され、その御病気ですぐ亡くなられた。

御本人の病態のお苦しみは素より、御遺族には大変お気の毒で、心より悼み申し上げます。

天に召されることについては少々表現に困ることがありますが、キリストの復活の日に向かって、しばしのお休みであろうことは疑いありません。

御発病中にも現世の始末のこと等、委託をきちんとされた由。人生の修練の賜物と思います。

そもそも筆者の如き後輩が、並みいる先輩をさしおいて語ることは本来はふさわしくありません。現に井門先生(現日本宗教学会長)が葬儀のさい、友人として弔辞をお述べになられたし、藤田富雄先生がもっともふさわしい筈なのに、龍谷大学の学会懇親会のさなか、にこやかに君やれよと弔文のことを示された。驚くさなか、村上助手(筆者の怪我入院時、代講してもらった)が傍らに控えていて、宗教学会案内誌に、安齋先生、宗教学年報別冊所載、四百字詰め10~20枚、締め切り11月30日と大書し、あっという間に見えなくなった。独りとり残されて、乗せられたの感があり、しまったと思ったがもう遅い。

日中、沈痛なメロディに感傷的になって仲間と話し込んでいたせいもある。

些か分かるだけの御略歴を記すと、安齋先生は三年先輩で二高出身、宗教社会学専攻、上智大学で長く教鞭をとられた。海外によく出張なされた由。時には国内にも。

筆者の如きプロテスタント系は無関係としても、専攻等いろいろ違う。

共通の土俵は宗教学研究室出身(ま、岸本門下)、宗教研究の一端を担っていたこと。筆者は目下、生死一如の問題から天台本覚に興味をもち、その

根底に関わるとして仏教(定義が難しい)とキリスト教の対話をめざしている。その内訳は今は略します。

安齋先生の学年は戦後の宗教学研究室のある黄金時代を担われた筈。数多かった筆者の学年は甚だ不熟な卒業生でしかない。

研究室関係の親しさもさること乍ら、安齋先生との接点は、ある種のというべきか、スピリットにある。それも日本酒なのである。

スピリットがスピリットを昂め、「鈴木さん、さあいきましょう、ヤパーネルですよ」と。このヤパーネル、リーベンチュウの一言で安酒屋を探し求める。近年、藤田先生と共に何回か御一緒した。

話がはずんで長い時間を過ごしても、何一つ頭に残っていない。

おっとりした調子の安齋先生の仙台なまりの少し高めになるアクセントは覚えていても、中身が思い出せないのは緊張を含んで、ともかくスピリットのさしまわしである。ピッチが早くてもおいやになられなかった。

たぶんに話しは学会のことろもろ、宗教学研究室というムラ社会(井上順孝君の巧みな言)のことなどがある。

近年の嘲風会(学会後の)は宴会ばかりでなく研究会が十二月末にあり、多少ともさま変わりの所はあるが、ある傾向として、若い人らとは二分化の方向にある。もうこの辺で適当に分極化するのが妥当との何人かの声がある。テーブルが分かれると浮き上がってう。余り良い集まりともいえない。若さは雰囲気独占してうのか。燃え上りは結構であるが、そこに疎外感が伴う。参加を控え目にしている人たちがいるのも事実である。

然し今年(98年)の京都東山の粟田山荘の会は良かったものの、学生ら若い人の参加が一人もなかった。要は、一万円でも経費が高いというこ

とらしい。筆者などはかの著名な場所に集うだけでも嬉しく、むしろ光栄に近いものがあった。京都は一見さんお断りが多い。次元の落差でもあったろうか。

頻りに井門先生は京都嘲風会の往時の豪華さを口にされていたが。

今年の参加者は二十一名で（以下敬称略）、脇本大人は御不在（学会不参加だった）、有能そのものの田丸君は足もとゆえの御不参、長老組が井門、藤田両先輩、少し間をおいて鈴木、そしてそのあと天理大の宮田君。折衝に苦勞した藪田君。その腐心が分かるようでもあった。

阿部國學院大、金井主任教授のはしゃぎが耳についた。座持ちであろう。私事にまつわる島藪君（現教授）のある指摘には少々参った。改築前の汚かった鳥ぎん本店に非はない。ま、罪ほろぼしの要もあろうか。

粟田山荘の日本酒良し、美味佳肴。天国の安齋先生おわさば、久しぶりにご満悦になられたであろうことは疑いない。昔、美女たりし女人たちの盃に酒の満たし。のどがなろうもの（手は出さない）であった。窓あけ放しての虫のすだく音。次日、大酔のあとで新幹線に乗り遅れる等の失態があり、御失笑されたに違いない。鶴岡君には迷惑をおかけした。内容略。

筆者には生前御多忙の安齋先生の御業績につい

ては存じ上げない。研究室関係の流れで、席を同じうするを許されただけであるから。

それにしても、研究室関係の方々の御帰幽は心さびしい。

近年、館先生、田沢先生はそれでも御召命時、八十を越していらっしゃる。

安齋先生は現日本人の平均寿命を少し縮められたのではないか。もったいない話しであるが、あの戦中戦後の兵役の御苦勞が御身体にこたえられたであろうことは疑いない。兵服姿で復員された話はよくうかがった。そのときから五十年余。苦しみは余談話しの一つでしかなくなっている。才能の浪費を強いられたのである。今は亡き柳川氏のこともある。

さて、今や現実の世から、キリストの日に向かわれた安齋先生、そのまなざしの柔らかさをひしと感じ乍ら不熟の筆をとった次第。思い出を多く共にされておられる諸先輩をさしおいて、失礼そのものとは思ひ乍ら。まだ少し仕事に手を染めることをお許し願って。

ともあれ、主の御名を讃えつつ、クレメンス・安齋先生のみたまに。

追：

これは藤田先生の悼みの代弁の一部とお許しを乞うて。近く一周忌があられる由。